

ソ連作家同盟外国委員会での日本文学界 についての徳永直・岩上順一との懇談記録

訳・註：梅 津 紀 雄

解 説：吉 田 司 雄

The Proceeding of the Meeting with Sunao Tokunaga and Junichi Iwakami on the Japanese Literary Scene at the Foreign Committee of the Union of Writers of the USSR

UMETSU Norio, YOSHIDA Morio

訳者まえがき

以下に掲げるのは、1954-55年の冬に作家の徳永直と文芸評論家で翻訳家の岩上順一がソ連作家同盟の招聘により、第2回全ソ作家大会に招かれてソ連を訪問した際、作家同盟の外国委員会で日本文学の研究者や翻訳家と懇談した際の記録である¹。訳者は、いわゆる「雪どけ期」の日ソ文化交流に関する研究を進める上で、ロシア国立文学・芸術文書館に所蔵されているソ連作家同盟の文書の目録を調べ、この議事録を見出した。同文書館はソ連時代から存在し、モスクワを拠点とする文学・芸術関係の国家機関および個人の文書を広く所蔵している。ソ連時代の公的機関は国や共和国、州・市などに属していて、それらで作成された文書は多くが破棄されることなく保存の対象となった。作家同盟以外には、例えば、作曲家同盟、ポリショイ劇場、文化省などの文書が保存されている。

徳永も岩上もそれぞれ訪ソ体験をいくつかの雑誌記事に記した他、徳永は『ソヴェト紀行』（角川書店、1957年）、岩上は『モスクワ・北京・文学の旅』（河出書房、1955年）を出版しているが、いずれもこの懇談についてはなぜか言及していない（おそらくは話題がソ連ではなく、日本の状況になるからであろう）。ただし、徳永は「ソヴェト同盟をたずねて」においてこの懇談が実施されたことについて言及していた²。この議事録により、その詳細が再現できると考え、訳出することにした。当時のソ連側での近現代の日本文学についての理解水準や、日本の状況についての徳永と岩上の認識について具体的に知ることができる。この後、多くの作家・評論家がソ連側の招きで訪ソすることになるが³、そのはしりとしても興味深い。

ただし、このロシア語の議事録には誤記が多数存在する。それは単なるタイプミスというレベルを超えた数と質の誤りであり、おそらくそれが公表されてこなかった原因であると思われる。今回の訳出に当たっては、できる限りそれらを推定して修正するよう努めたが、不明な箇所や不確実な箇所があるため、以下の措置を行った。

1. 推定して訳した箇所や推定不可能な箇所に関しては、ローマ字に翻字して原綴を示した。推定した箇所は推定した語句に続けて、推定不可能な箇所は原綴のみを示した。原綴は、米国議会図書館方式を用いてローマ字に翻字した。その際、йはjとし、я、юはja、juで表記した。ここでのjは「ジャ」音ではなく、短い「イ」を示す。
2. ロシア語による日本語の翻字は原文のものを尊重した。特徴としては、ザ行はdz-/dz-で示される。またハ行の音がないため、x-/kh-で代用される。例えば、ザはдза/dza、ハはха/kha、またシはси/si、ワはва/vaとなる。

誤記の一例を挙げると、原文6頁（本稿4頁）目にあるСиганауэの表記は、翻字すれば、Siganaueとなる。日本近代文学に関する基礎知識があれば、これはСига Наоя/Siga Naoya 志賀直哉の誤記であることがわかる。しかし、それが訂正されていないため、速記者（S.A. ユージナと記載）にはその知識がなかったと判断される。したがって、他の箇所もそれを前提とし、速記録の誤読の可能性も踏まえた読解を要する。

今回、可能な限り、推定を行ったが、不明箇所も残り、推定そのものも不適切である可能性がある。お気づきの点があれば、ご指摘いただければ幸いです。

アブレチン⁴：同志の皆さん、私たちの尊敬すべき客人である、日本の作家の徳永直さんと岩上順一さんが、ご厚意で我が国の日本文学研究者、専門家と、現代日本文学について懇談することを快諾してくださいました⁵。どんな手順で進めたらよろしいでしょうか。質問をするか、あるいはお二人に報告をしていただいて、それから質問をしましょうか。

徳永直：質問をしていただけたらと思います。

お招きにとっても感謝しております。本日は、日本文学に関心を寄せる方々がこんなにたくさん集まってくださり、とても嬉しいです。現代日本文学の状況を知っていただきたいと思うのですが、どんな点にみなさんが興味をお持ちか、存じ上げませんので、まずはみなさんからの質問をお聞きしたいと思います。

アブレチン：ご質問はいかがですか。

同志リヴォーフ⁶：私は次のようなことに関心があります。私たちが知っているように、近年外国に、共産党員でもなく、平和のための闘争にも参加していないけれども、その作品において一般庶民の生活や、その生活の重苦しい状況、そして彼らの闘争を正しく示している、たくさんの数の作家がおります。私たちは、日本にそうした作家がいるのかどうか、どんなことに彼らに取り組んでいるのか、そしてどんな作品を書いているのか、ということに関心があります。これが最初の質問です。

最近、私は比較的若い日本の作家、野間宏〔1915-91〕の作品に接する機会があり、この作家は作品ごとにますます著しい成功を収めています。彼は今どんなことに取り組んでいるのか、彼にはどんな計画があるのか、彼の創作についてお聞かせいただきたいと思います。

1954年に雑誌『文学の友』において〔伊藤整の〕長編『火の鳥』が広く宣伝されました⁷。これは本当に、この雑誌が宣伝したように、興味深い本でしょうか。

そして最後の質問です。私は徳永直さんご自身の創作計画に関心があります。徳永さんは何に取り組んでらっしゃいますか、どんな計画がありますか。モスクワ滞在中に何か書くことは考えてらっしゃいませんか。

徳永直：野間宏についてですが、彼は日本共産党員です。戦後、彼は『青年の環』⁸という大作に3年間取り組みました。この作家の初期の作品には心理主義の痕跡があります。朝鮮戦争が始まった1949年に、彼は『真空地帯』という本を書き上げています⁹。この作品はリアリスティックですが、終戦直後の3~5年間の彼の作品を見るならば、この時期のこの作家の創作にはまだ心理主義が観察されます。しかし現在、彼はきっぱりとリアリスティックな立場へ移行しており、私たちは彼に大きな期待をかけています。1950年に彼は共産党に入党しました。

共産党員ではないけれども進歩的な作家たちの中では、阿部知二、田宮虎彦 Tamaja Torokhiko、中野孝次 Nakhadz Konuzo、青野季吉 Aogo Suekitchi、広津和郎、宇野浩二 Uno Kootjan、武田泰淳、梅崎春生、堀田善衛 Khotta Dzun"ajなどが挙げられます。しかし、彼らの作品のいずれかを選び、彼らの社会的活動と比較してみるなら、それらの間に大きな断絶が見られます。例えば、平和のための闘争に積極的に参加しているある作家が、それにもかかわらず、自分の文学的信条においてはシュールリアリストだということがあります。

しかしそれに関わらず、作家たちは皆、平和のための闘争という事業に強い関心があり、そうした作家たちを私たちは進歩的とみなしています。

私の創作計画に関して何かお話しできますでしょうか。昨年末に自作の『静かなる山々』の第2部を完成させ、休息後は、第3部に着手することを考えています。モスクワでは、私は『新潮』600号を記念した寄稿を考えており¹⁰、それ以外に、モスクワでの自分の印象を雑誌『Chiokharu』に書きたいと思っています¹¹。

私の本『静かなる山々』に対するソ連での好意的な評価¹²は、私が日本で困難な状況にあっ

たとき、私を大いに助けてくれたといえます。そのため、私はあなた方に深く感謝したいと思っております。

キム¹³：私には次のような質問があります。同志徳永と岩上に、ここ数年の日本文学における最も重要な出来事について、かいつまんでお話いただければと思います。それから、それに関連してもう一つの質問があります。日本共産党は民主的な人民解放統一戦線のスローガンを放棄しました¹⁴。文学の領域では、そうした戦線は存在していますか。同志徳永が挙げてくださった進歩的な作家たちのリストに、阿部知二や堀田善衛 Khotta Dzun“aj といった名前を私は見出しました。彼らは反動的な作家でしたが、現在は進歩的な作家として取り上げられています。ということは、文学において民主的な統一戦線が存在するという事なのでしょうか。

そして2つ目の質問です。同志徳永と岩上に、ロシア語に訳すべき一連の小説を推薦していただければと思います（翻訳できるのは10作ほどかもしれませんが）。

岩上順一：戦後日本文学の道は、とても複雑です。よく知られているように、日本はアメリカ占領軍の抑圧下にありました。アメリカのイデオロギーは文学の領域にも浸透しています。特にサンフランシスコ講和条約締結後は日本がアメリカの従属下にあることが明白になり¹⁵、それについては、共産党員のみならず非党員の作家たちも知っております。

朝鮮半島におけるアメリカの侵略〔朝鮮戦争〕は、日本の状況を非常に複雑にしました。アメリカ占領軍に対する人民の抵抗の増大とともに、日本の作家たちの闘いも強化されました。日本共産党は、民族解放と平和、民主主義のために、人民の先頭に立って闘っています。そして、文学の問題についての共産党の路線は困難な道をたどっています。組織統一の運動は多くの段階をたどり、いっそう大きな発展を遂げています。まさにそうした闘争（原爆に対する闘争や朝鮮における侵略戦争に対する発言、松川事件¹⁶に関する逮捕者解放のための運動、そして平和闘争一般）がイデオロギー的、政治的な方向で行われています。こうした運動には、進歩的で「左翼的」な作家たちだけでなく、ずっと多くのそれ以外の作家たちも加わっています。明らかに、ここで良い例となっているのは松川事件です。

松川事件における逮捕者の解放闘争は、進歩的な作家たちによって先導されており、この闘争には、志賀直哉 Siganaue や川端康成 Kaubato Nasinari、石川達三 Isikava Takhuzo のように、最も反動的とみなされているブルジョワ作家たちも加わっています。

今彼らは、松川事件の参加者に対する公平な裁判のための署名集めの運動に加わっています。

阿部知二は平和闘争の諸問題において特に積極的です。彼は中華人民共和国に招かれ、中国で中国の作家たちと会い、特に袁犀と何度も会いました。中国からの帰国後は、彼の作品はとても進歩的になりました。

それ以外にも、彼は共産党の指導のもとに創設された〔日本〕文学学校¹⁷の校長を務めています。

したがって、共産党員の作家たちだけでなく党員ではない作家たちも、党の活動に参加し、党と同じ道を歩んでいます。

こうしたことがすぐに人民統一戦線のための闘争へとなだれ込んでいくと考えるのは困難です。しかしながら私たちは、このように作家たちの闘争への参加が繰り返されたおかげで、統一戦線を達成できるかも知れないと考えることはできます。

ロシア語に訳しても良い作品の推薦に関しては、『静かなる山々』の第2部を挙げるができます。

キム：それは推薦がなくとも私たちは皆採用します。

岩上：それから、宇野浩二、足柄 Asigora〔定之〕、阿川弘之『魔の遺産』¹⁸が挙げられます。

会場から：足柄と阿川は、初めて聞く名前です。

岩上：足柄は労働者で鉄道員¹⁹、阿川は志賀直哉 Siganauje の弟子で、新しい作家です。（さらに）挙げられるのは、春川鉄男『日本人労働者』²⁰…

会場から：それはすでに学位論文として訳されています。

岩上：杉浦明平 Sagiura Minte²¹『基地六〇五号』…

会場から：二章が訳されていますが、まだ終わっていません。それは雑誌から訳されました。

岩上：霜多正次 Simoita Masadzi『軍作業』²²、山田うた子²³、〔江馬修〕『山の民』²⁴、〔中野重治〕『むらぎも』²⁵、佐多稲子『若い意欲』²⁶、それから〔同じく佐多稲子の〕『ズボンを買うに』、これらは短編小説です。ここでは、日本の学生たちとアメリカの帝国主義者たちとの闘いが描写されており、『若い意欲』はアメリカの抑圧に対する朝鮮と日本の若者の闘争が描写されています。

民主主義と平和のための闘いに積極的に参加している進歩的な作家の数には Kawadzhura を加えることができますし、速記録が編まれるときには、補足としていくつかの名前をこのリストに付け加えたいです。特にこのリストに推薦したいのは、兎玉花外²⁷ Newato Rinoto

『鶏の歌』、そしてゼネストが鎮圧されたときのメーデー事件について書いている Kasisada Masaru です。この事件には多くの若者が参加し、多くが逮捕され、勾留されています。この作品は若者の闘いに捧げられているのです。

会場から：私は宮本百合子 Yamota Udako²⁸ の作品を研究しています。彼女の作品の評価がまちまちであることを知っていますし²⁹、岩上さんの最新の批評も知っています³⁰。現在、この作家がどのように評価されているのか、興味深いです。

岩上順一：ブルジョワ・インテリゲンツィヤの環境の出身であるにも関わらず、宮本百合子 Yamota Udako が最も進歩的な女流作家であることはまったく疑いありません。彼女は著しく変わり、確たる創作の道を歩みました。

当初、彼女の作品にはヒューマニスティックな傾向がありました。彼女はプロレタリア文学において重要な位置を締めていました。戦後、彼女は日本文学の民主化のための闘いに多大な努力を費やし、日本文学に大きな貢献をし、非常に沢山の自伝的な作品を残しました。しかし時折生じる問題は、彼女のいくつかの作品にブルジョワ的なイデオロギーの残余が感じられるということです。そして彼女の創作手法は完全にリアリスト的な立場に接近したのか、という問題が生じるのです。

その他にも、さらに細かい問題についての見方においても、食い違いがあります。もしそれが単に芸術の問題にのみ関わっているのなら、その克服も容易だったでしょうが、そこには政治的な問題も加わっています。それゆえここでの議論は困難になるのです。

私たちはこの問題に関しては、さらに大いなる闘いを行わねばならないと考えています。

徳永直： 宮本百合子の作品全集はありますか³¹。

会場から：ええ、あります。

徳永：『二つの庭』はとても人気のある作品です。

会場から：高倉輝³² [1891-1986] は何を執筆していますか。

徳永：彼は党活動の関係で何も書いていません。彼は地下活動をしています。

会場から：山田うた子 Yamajo Utako の健康状態はいかがですか。彼女の作品はとても興味深いです。

徳永：私は彼女には会っていません。聞いたところでは、彼女には軽い病がありますが、回復に向かっているとのことでした。

会場から：彼女に宜しくお伝えください。岩上さんの執筆計画をお聞きしたいです。

岩上順一：私は志賀直哉 Siganauja について書き終えて、現在はそれを改訂しています³³。また私は『ゴリキー文学論』の翻訳にも取り組んでいます。第1部と第2部を訳し、今は第3部に取り組んでいます³⁴。

キム：いまフランスの進歩的な作家たちは、低俗な冒険小説の戦線でアメリカ人と競おうとして、同様に推理小説を書くようになりました。日本でもこうした「大衆文学」が存在していますが、これに対して進歩的な作家たちはどのように反応していますか。こうした文学は非常に広く普及しているものですから。

そしてぜひ伺いたいのは、岩上さんが志賀 Chinga をどのように評価しているかということです。私たちは、彼が小説の巨匠であることを知っていますが、あなたは彼の作品をどのように評価していますか。

岩上：ブルジョワ・リアリズムの観点から、彼はその典型的な代表者です。しかし、彼の作品を取り上げるならば、それは良心的な知識人をとらえる矛盾の描写として評価できます。彼はトルストイと同様に、矛盾に満ちています。私はこうした志賀直哉の矛盾をできる限り暴きたいと思っています。

他方で、低俗な出版物については、[田村]泰次郎 Tajzera を挙げられるでしょう。彼は十分にこの路線を歩きました。ここで彼以外になんらかの一定の傾向を挙げることは難しいです。

キム：農村や事業所で、手書きの雑誌（いわゆる「ガリ版雑誌」）はどのくらい出されていますか。

徳永直：合わせれば千を超えますが、正確な数字は挙げられません。

リヴォーワ：私が興味を持っているのは、雑誌間の相互の関係です（名前を挙げる）。これらはどういった雑誌ですか。

徳永直：『新日本文学』は、戦後 1945 年に創設された新日本文学会の機関誌です。この会は、志賀直哉、広津、宇野浩二といった作家たち、戦時中に、心に秘めていたとしても、敵

を支持せず、戦争に反対した人々、ベテランの日本の作家たちからなる人々の指導で創設されました。この会のメンバーには同様に、かつて日本作家同盟に加わっていた、ベテランのプロレタリア作家たちも加わっています。

2-3年後、作家グループや共産党の活動が活発になってきた頃、志賀直哉や広津和郎は脱会しました。

新日本文学会は、戦後の時期の進歩的な日本の作家たちの代表者のメガフォンでした。

1950年夏、日本共産党に分裂が生じ、それは新日本文学会の組織にも影響し、同様に分裂が生じ、分裂に異を唱えた作家たちは連帯し、自分たちの雑誌『人民文学 Dzhimi Mungab』を持ちました。こうした対立は3年間に渡って続きました³⁵。

日本共産党の分裂は3年後に一掃されました。かつて新日本文学会に入会し、同会から排除された作家たちも、自己批判を行って同会の会員の権利を復活させました。『人民文学』の課題は解決したため、〔後継誌の〕雑誌『文学の友』があらゆる問題に取り組み始めました³⁶。組織的統一に関してはある種の成果を達成しましたが、理論的な不一致の問題はあまり解決を見ていません³⁷。

組織的な点からは、雑誌『文学の友』は新日本文学会のメンバーであり、統一的な組織の全体のメンバーを構成しており、『新日本文学』と『文学の友』との関係は敵対的なものではなく、両者は協同の原則において活動しています。

(休憩が告げられる)

ネムゼル³⁸：私たちの客人たちにもっと質問がありますでしょうか。

会場から：私たちの客人たちは、私たちの新しい雑誌『ソ連の東洋学』に日本文学の状況についての論攷を書くことに同意していただけないでしょうか。モスクワにいらっしゃる間にその論攷を書いていただいても構いません（同志徳永：私たちは喜んでそうさせていただきます）。

会場から：日本の古典文学では何が翻訳に値するでしょうか。それからもう一点、我々はどうかがたいことがあります。藤森成吉 Khvazilodo Khenichi [1892-1977]は何に取り組んでいますか。よろしければ、彼について、彼の社会活動についてお話しいただけますか。

岩上：藤森成吉³⁹に関しては、彼は平和のための活発な闘士であり、平和擁護日本委員会委員であります。彼は近年、長編小説に取り組んでおり、その題名を私は思い出せませんが、その小説は若者を扱っていて、その人生、愛と闘いを描いているということだけ覚えていません。この小説は今ほとんど完成しており、近く出版される予定です⁴⁰。こうしたことすべて

を私は聞いただけで、原稿自体を見たわけではありませんので、詳細についてお伝えすることはできません。

古典文学に関してお勧めしたいのは、詩のアンソロジーである万葉集、長編物語の源氏物語、平家物語、それから近松〔門左衛門〕が優れています。それから、〔国木田〕独歩 Dolio⁴¹の短編、二葉亭 Futotateja〔四迷〕の『浮雲』、島崎〔藤村〕の小説『家』、『芽生』、夏目〔漱石〕の『道草』、徳富〔蘆花〕『不如帰』『黒潮』です。

リヴォーワ：『黒潮』は、現代日本にはアクチュアルではない問題を取り上げています。それによって小説の民主的傾向が消えたわけではありませんが、具体的でアクチュアルな問題は提起されていません。

会場から：でもその作品は歴史的観点において興味深いかもしれません。

岩上：ブルジョワとの闘争という観点からは、この小説は今日においてもアクチュアルな意義を持っています。というのは、今日も同様の状況が続いているからです。吉田内閣の瓦解⁴²は、ブルジョワ内部の衝突の結果です。

会場から：私は詩についてお聞きしたいです。詩集や雑誌で、民主的な良い詩人の、どんな良い作品が現れていますか。

徳永：峠三吉 Kavadzi Roko〔1917-53〕⁴³の詩を挙げることができます。彼は共産党員で、広島 Khorasimo にいて、そこで原爆の事件を経験しました。去年亡くなっています。さらに、原爆を扱った詩のアンソロジー『死の灰』⁴⁴を挙げることができます。この詩集は、作家同盟に持参しており、ここに 있습니다。また『松川詩集』⁴⁵も挙げられます〔宝文館、1954〕。松川事件で逮捕された人々を釈放させる闘争に捧げられた詩集です。この詩集も私たちが持参しました⁴⁶。

詩人の中からは、さらに壺井繁治、深尾須磨子、岡本潤と、日本に住んでいて日本の民衆のスタイルで書いている朝鮮人の詩人、許南麒 Kholambi〔ホ・ナムギ〕を挙げるできます。

さらに多くの詩人がいますが、すぐに名前を挙げられないため、後で速記録に加えさせていただきます⁴⁷。

会場から：私たちに興味があるのは作家だけではありません。日本の統一的な民族芸術のための、文化、芸術、絵画、音楽の活動家の統一戦線はどのように発展しましたか。

徳永：文学界では、統一戦線のための闘いは、松川事件以後に鮮明に現れました。この運動は非常に広範囲の人々をとらえました。この運動に加わらなかった作家は一人もいなかったでしょう。しかし他方では別の状況もあります。それは、広津の指導する派閥と私たちが所属している新日本文学会の運動に関することで、ここでは統一はまだありません。広津和郎 Khirota Tsukadze [1891-1968] は、自分が共産主義者とみなされるのを望んでいません。しかしながら、個人的な関係においては、私たちは非常に緊密にやり取りを行っており、彼は私を大いに援助してくれているほどです。

松川事件で逮捕された人々の解放のための闘争が私たちを糾合し、私たちがそこで共通の路線を見出したことは、まったく疑いありません。しかし、この方向での統合で警戒されているのは、危惧されているように、「自分たちが共産主義者とみなされる」ということです。

文学と政治の関係の問題に対して、私の見方は広津和郎 Khirotsu Tsukadze の見方とは異なっています。広津の言明では、文学が政治に従属するような状況は許されません。この立場は、日本および日本の文学界で非常に普及しています。しかしながら、若い作家たちはこの問題に関して、もっと自覚的であり、もっと意識的にこの問題に対しています。このため私たちは、徹底的に、文学界にこのような見方が存在する限り、戦わねばならないと考えています。私たちはこの問題の正しい理解のために戦わなければならないのです。

しかし、文学的制度的問題の観点から克服されていない壁が存在するとしても、作家間の個人的な関係は、非常に緊密で非常に良好です。

その他の芸術領域においても同様の困難な状況があります。困難な時期を迎えています。しかしながら、統一戦線のための闘争は、それでもなお格段の進歩を遂げました。民主的な歌や詩のための運動は、大衆の中にも非常に深く浸透しました〔うたごえ運動を指す〕。そして、以前は進歩的ではなかったような作曲家たちが大衆とともに活動し始めています。

そうした運動は、勤労大衆と知識人とを結びつけました。昨年作曲家の大会が三日間開催され、約3万人の人が参加しました⁴⁸。これは良い指標です。特別のオーケストラが組織されましたが、東京交響楽団との統合はまだです。ただし、東京交響楽団は現在、しばしばシヨスタコーヴィチやプロコフィエフらソ連の作曲家の作品を演奏しており⁴⁹、統合のための前提条件は熟しつつあります。

日本の画家たちや造形芸術の活動家たちは、まだ統一を達成していないとは言えませんが、それでもなお、彼らはまだ自分たちの芸術家協会を持っていません。平和のための闘争の展覧会やその他の展覧会に参加している画家たちがいますが、一人で活動する画家たちもいます。

日本の映画製作者たちは、『太陽のない街』[1954]、『蟹工船』[1953]、『女ひとり大地を行く』[1953]といった多くの進歩的な映画を製作しました⁵⁰。これまで反動的な映画会社で働いてきた俳優たちだけでなく、映画監督も、今や進歩的な映画へ深い共感と友好的な態度を示しています。しかしながら、すでに述べたように、これまでアメリカの占領下のプロパガ

ンダ、アメリカのイデオロギーが存在していたため、文化活動家の完全な統合はおそらく、困難な事業となるでしょう。彼らは合同し、人民のために活動するために全力を注いでいますが、そのすべてには苦勞が伴っています。

会場から：作家は常に、歴史家との緊密な結びつきのもとで執筆しています。現代日本や中世日本の歴史を専門とする、進歩的な歴史家の名前を上げていただけますか。

徳永：私たちは進歩的な歴史家として、渡部義通、〔松本〕新八郎、禰津正志、豊田武、伊豆公夫〔赤木健介〕、羽仁五郎、高橋磯一、井上清らをあげることができます

それから、私はお尋ねしたいのですが、森鷗外の『山椒大夫』、『阿部一族』といった作品は訳されていますか。これらの作品は、翻訳が望まれる作品のリストに入れていただきたいと思えます。それらは歴史的事実に依拠している作品です。それらの事実の叙述に関して、我が国で見解の違いはあり得るとはいえ、これらの作品における再現の真実性と高度なリアリズムを指摘しなければなりません。

岩上：私はみなさんと、こうしたことのためにもっと長い時間を費やして、ソ連でどのくらい日本文学が研究されているか、一体何が研究されているのか、ソ連の同志たちがどんな問題に関心を寄せているのかを話し合いたいです。

ネムゼル：東洋学研究所は、研究所の연구원たちと特にこうした問題について話し合えるよう、日本の同志たちを招聘することを望んでいます。

徳永：喜んでその招待を受け入れましょう。

ネムゼル：同志徳永に結びの言葉をいただけませんか？

徳永：現代の（民主的な）日本にとって大きなサポートとなるのは、日本文学がソ連で研究されることであり、批評も存在し、印刷物に掲載されています。昨年日本で掲載された日本文学についての同志〔イリーナ・〕リヴォーワの記事は、我が国で非常に強い印象を与えました。

一方、日本の文学界は、『若き親衛隊〕〔ファージェーフ〕や『真実の人間の物語〕〔ポレヴォイ〕、『昼となく夜となく〕、『ロシア問題〕〔いずれもシーモノフ〕、『金星勲章の騎士〕、『地上の光〕〔いずれもババエフスキー〕などの影響を受けています。こうした文学は、戦後ソ連に登場したもので、日本の労働階級や若者の中に大衆的読者を得ています。それ以外に、言わなければならないのは、莫大な数の人々がロシアの古典文学やオストロフスキーの『鋼

鉄はいかに鍛えられたか』のような戦前のソ連文学をも読んでいるということです。日本の進歩的な若者は、そうした作品を何度も読み直しています。

日本の作家たちの基本的な思想と願いは、労働者階級や農民の生活を叙述する文学は、もっと力強くなければならない、ということです。私たちはそのような文学がもっと力強くなれば、作家たちとの統一が達成され、何らかの運動が前進すると考えています。しかしながら、こうした文学は、労働者階級と農民のテーマの解決の点では、まだ弱いままです。この弱さの原因は、すでに指摘したように、日本の文学界が、複雑な状況に陥り、覆われていることにあります。そして新日本文学会のような進歩的な作家組織は、すでに7年もの間、文学作品の批評のための指標（基準）を欠いているのです。

こうしたことから、ソ連文学、そして同様にソ連の理論や批評は、私たちに大きな指導的な影響を及ぼしていると言わねばなりません。

日本の労働者と日本の農民は、朝鮮戦争の時点から大きく成長しました。昨年の石炭産業の労働者の闘争、そして三大財閥の闘争、金属工業の労働者の闘争、これら全ては、日本の労働者階級がいかに思想的に成長したかを物語っています。他方で、労働者、農民や学生の文学サークルが非常に大規模に組織されています。

そして私たちの文学は、労働者階級や農民の運動や闘争から取り残されています。私たちはこの欠点を一掃するために全力を注いでいます。そしてそのために、ソ連文学と日本文学がもっと緊密に接近することを望んでいます。

ネムゼル：出席者を代表して、我らが客人に対し、興味深く内容のある懇談に感謝を申し上げます。我が客人の興味のある問題全てに関しては、東洋学研究所で開催される懇談会で回答がなされる予定です（拍手）。

【解説】

作家の徳永直と評論家の岩上順一は1954年12月の第2回全ソ作家大会に参加、モスクワ滞在のあと中国の北京に寄って翌年3月に帰国する。旅の記録は、岩上順一『モスクワ・北京・文学の旅』（河出新書、1956年7月31日）、徳永直『ソヴェト紀行』（角川新書、1957年8月30日）にまとめられているが、徳永によれば、二人は12月22日未明に羽田飛行場を出発、香港、ベトナムのサイゴン（現ホーチミン）、タイのバンコック、インドのカラチ、エジプトのカイロ、イタリアのローマ、スイスのジュネーヴ、ドイツのデュッセルドルフ、デンマークのコペンハーゲン、ノルウェーのオスロを経由してスウェーデンのストックホルムへ、そこで飛行機を乗り換えフィンランドのヘルシンキへ、さらに飛行機を乗り換えレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）を経てモスクワまで赴いた。わざわざ遠回りの行程をとったのは、当時ソ連とは国交がなく、直接向かうことはできなかったからである。到着したのは12月24日深夜で、全ソ作家大会はほとんど終了、翌25日は休会で、26日午後4

時からの閉会式に出席しただけとなった。その後、モスクワに二ヶ月滞在、イルクーツクからモンゴル経由で中国に入り、中国の北京に一ヶ月滞在したあと、広東、香港経由で帰国の途に着いた。

印刷所植字工時代に体験した共同印刷争議を題材とする『太陽のない街』（『戦旗』1929年6月～11月）の作者は、『ソヴェト紀行』でも「勤労者」に目を向け、レニングラードのウリツキー煙草工場やモスクワの製鉄工場、モスクワ郊外の「モロトフ」コルホーズ（集団農場）、新聞のプラウダ社などの訪問を印象深く書きとめている。『モスクワ・北京・文学の旅』はソビエトの文学者たちの活動により目が注がれ、全ソ作家大会閉会式やレセプションでの会話から、ゴーリキー博物館近くの作家同盟本部で出会った人々の印象、工場の文学サークルの若い作家たち、レニングラード作家同盟支部で出会った人たちなど、実名入りで文学者との交流を語っている。しかし、徳永や岩上がソビエトの文学者に日本について何を語り、またどう受け止められたかは、紀行文という性格からほとんど知ることはできない。この作家同盟外国委員会での会合の記録は、そうした空白を埋める貴重な資料である。

会合が行われたのが1955年1月7日であることは、『新日本文学』1955年3月号に掲載された徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」という中野重治宛書簡の形式を採った報告文からわかる。作家同盟本部の「外国委員会の室で午後四時から日本文学関係者五十人ばかりの人が集つて」行われたそうで、徳永はどのような質問があったかも具体的に記している。しかし、この記録と必ずしも一致している訳ではない。速記記録という性格からどちらが正しいとも言いきれないが、あわせ読むことで、まだ国交もない異国での交流やソビエト側の日本文学に向けられた関心のありようを知ることができる。

1954年12月15日から26日までモスクワのクレムリン宮殿で開催された全ソ作家大会は日本でも注目されていた。スターリンの提唱した社会主義リアリズムが公式の創作方法として確立した1934年8月の第1回大会から20年を経て、ソ連の指導的創作理論はどのような方向へ向かうのか。敗戦後の1945年12月に旧プロレタリア文学運動に関わった文学者たちが中心となって創立された新日本文学会にとっても、大きな関心事であった。新日本文学会の機関誌『新日本文学』を繙くと、1955年1月号の鹿島保夫「ソヴェト作家・批評家の仕事と生活」では作家同盟の中央機関紙「文学新聞」が大会準備のために設けた欄の文章を紹介しており、2月号には「全ソヴェートの文学僚友へ」という新日本文学会中央委員会からの挨拶文と徳永直「そわそわしながら—ソヴェト作家大会に招かれて—」という二つの短文が掲載されている。3月号には先に触れた徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」が載っており、4月号で「ソヴェト作家大会・特集」が生まれ、山村房次「第二回ソヴェト作家大会と社会主義リアリズムの諸問題」と大会における演説からルイ・アラゴン「詩における伝統とリアリズム」、リンゼイ「社会主義リアリズムと国民的伝統」が掲載される。

5月号では「ソヴェト・中国から帰つて」という座談会が載り、徳永直と岩上順一に桑原武夫、高杉一郎、蔵原惟人が聞き手として出席している。6月号には江川卓「第二回ソヴェ

ト作家大会と詩の問題点」、7月号には岩上順一「『鎌と槌』工場文学サークル訪問記」、9月号にはイギリスの作家ジャック・リンゼイの大会演説の全文「われわれの創作方法」が「社会主義国における社会主義リアリズムと、資本主義国における社会主義リアリズムとの相違が、労働のテーマにたいする適用においてももっとも明確に看取されると論ずるリンゼイの主張につよい興味を感じた」という山村房次「まえがき」をつけて掲載され、さらに徳永直「全ソ作家第二回大会に出席しての報告」が載っている。これは6月25日に法政大学講堂で行われたもので、『ソヴェト紀行』にも収録されている。大会の全貌は300頁を超える『ソヴェト文学』No.1「第2回作家大会特集」（至誠堂、1955年6月20日）にまとめられ、大会に参加したフランスの詩人ルイ・アラゴンの「第二回ソヴェト作家大会をめぐる小論」（と言っても180頁近い）を中心とした『アラゴン ソヴェト文学論』（小島輝正訳、大月書店、1956年12月15日）も刊行されている。

新日本文学会常任委員会で承認されての参加ゆえ、この会合での徳永や岩上の発言も、思っていたことを率直に述べたものだと即断することはできない。徳永直は「全ソ作家第二回大会に出席しての報告」で、「日本代表の一部また新日本文学会代表として」振る舞ったことを強調している。「日本代表の一部」というのは、「ひろく民主的な平和を愛する文学勢力を基調」とするためか作家同盟からの招待が一国三名で、日ソ親善協会の斡旋で他に志賀直哉と広津和郎が行くことになっていたにもかかわらず、健康上の理由などから二人が行けなくなり、他の代表の斡旋もうまく行かず、結局新日本文学会に所属する徳永と岩上だけが参加することになったという経緯があったからである。

加えて、「新日本文学会代表」という意味あいも微妙である。徳永は新日本文学会創立メンバー9名に名を連ねていたが、1950年に新日本文学会の運営に対する意見書を栗栖継と連名で提出、同年11月創刊の『人民文学』では岩上も徳永も1951年に亡くなった宮本百合子への攻撃に加わった。背景には、日本共産党がコミンフォルムからの批判が引き金となって所感派と国際派とに分裂した「五〇年問題」とその後の内部抗争とがあった。従って、1927年から28年にソ連に滞在し帰国後多くのソビエト紹介記事を執筆、自伝小説『二つの庭』（『中央公論』1947年1月号～8月号）、『道標』（『展望』1947年10月号～1950年12月号）に描くなどソ連と関係の深い宮本百合子の文学に関する質問は、もっとも答えにくいものだったかも知れない。徳永の発言にあるように、3年間にわたった共産党の分裂は一掃され、新日本文学会を一度は脱退した文学者たちも新日本文学会に復帰してはいたが、宮本百合子を一時期的ように声高に批判せずとも、「政治的な問題も加わって」「それゆえここでの議論は困難」だと口ごもりながら、しかし「さらに大いなる闘いを行わねばならない」と続ける岩上の応答からは、当時の微妙な空気を読みとるべきかも知れない。

徳永も「ソヴェト同盟をたずねて」で『新日本文学』と『文学の友』という二つの雑誌の関係について質問されたが、「私たちは、政党内におこった対立が文学団体内に対立をうみ、「新日本文学」と「人民文学」の対立をうみだしたこと、それが解決に達し「人民文学が廃刊

され、「文学の友」は労働者農民の文学を育てるという特定の任務をもつて刊行されたこと、したがって「新日本文学」と「文学の友」は協力関係となり統一の方向へ前進したことを、出来るだけ慎重に答えました」と書いている。わざわざこう報告していることにも注意すべきかも知れない。

たとえそうだとしても、野間宏の初期の作品には「心理主義が観察され」るが、共産党に入党した「彼に大きな期待をかけてい」という徳永の発言や、「文学において民主的な統一戦線が存在する」のかという質問に対する、松川事件に対する広津和郎ら進歩的文学者の闘争や阿部知二の平和闘争への積極的関わりを例に挙げての岩上の応答は、第2回全ソ作家大会の雰囲気をも過分に意識したものに見える。座談会「ソヴェト・中国から帰つて」での徳永の発言によれば、作家同盟の作家代表約1000名に資本主義国を含む32カ国から招待された約100名、さらに政府委員と国民一般の傍聴者約1500人が参加した大会は、芸術家による国際的な人民戦線結成の可能性を感じさせるものだったからだ。

しかし今日から振り返れば、つかのまの夢は歴史の荒波の中で霧散していったように思える。作家大会前年の1953年3月にはスターリンが亡くなり、エレンブルグ『雪解け』（1954年）が物議を醸していた。作家大会の翌々年1956年のソ連共産党第20回大会では、フルシチョフのスターリン批判が行われ、ソ連と中華人民共和国との深刻な亀裂へとつながった。前年日本共産党は第6回全国協議会（六全協）で武装闘争路線から平和路線への転換を決定するが、新日本文学会内部では共産党の政治介入をめぐって対立が深まっていった。

この間に、国際的にはソ連共産党第二〇回大会とスターリン批判、フルシチョフのチトー訪問、ポーランド事件、つづいてハンガリー事件、中国共産党の「プロレタリア独裁の歴史的経験について」から、「人民内部の矛盾の正しい解決について」などの文章が発表されるという一連の出来事があいついておこった。

さらに国内的には日本共産党の第六回全国協議会の諸決定があり、労農党は解体して社会党に合併する出来事などがあり、劃時代的な岸内閣の出現までには、鳩山首相が自らモスクワに飛んで国交回復に調印する等の、内に外に複雑な波紋をおこしながらも一貫した“歴史のまがり角”とでもいったような大変化と飛躍があった。

徳永直も『ソヴェト紀行』の1957年8月付の「あとがき」でこう書いているが、徳永や岩上にとって、1954～55年のソ連・中国訪問と作家同盟外国委員会での会合は「歴史のまがり角」一歩手前の至福な出来事であったのかも知れない。

注

- 1 ステノグラム беседа с Иностранной комиссией с Токунага Сунао и Иваками Дзюнити о литературной жизни Японии. РГАЛИ (Российский государственный архив литературы и искусств), ф. 631 (Союз советских писателей), оп. 26, ед. хр. 5667 (『外国委員会と徳永直、岩上順一との懇談記録』、ソ連作家同盟、国立ロシア文学芸術文書館所蔵、1955年1月7日。以上は目録のタイトルで、文書のタイトルは「日本の作家、徳永直と岩上順一との会合記録」)。徳永直(とくながすなお、1899-1958)は熊本県生まれのプロレタリア作家。印刷工として労働運動に参加した体験を『太陽のない街』(1929)として発表、戦後は新日本文学会創立に参加した他、『静かなる山々』などを執筆した。岩上順一(いわがみじゅんいち、1907-58)は文芸評論家、翻訳家。戦前の著作に『歴史文学論』『横光利一』、戦後の著作に『変革期の文学』がある他、ロシア・ソ連文学の翻訳を多数残した。2人は、1954年12月に開催された第2回全ソ作家大会に、日ソ親善協会の斡旋を受け、新日本文学会の代表として招かれて訪ソした。当初は、志賀直哉、広津和郎の訪ソが期待されていたが、彼らは健康上の理由などで辞退していた。ただ唯一、徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」『新日本文学』1955年3月号(10(3))、184-187頁に中野重治宛公開書簡の形で言及されている。この「書簡」では徳永は、「会常任委の決定にしたがって、会代表として全ソ作家大会に行ってきます」と自らの立場を記している(180頁)。作家大会は12月15日に開幕したが、徳永らは旅券の入手の遅れなどから出発が遅れたため、モスクワ到着が12月24日深夜となった。翌日は幹部会のみだったこともあり、26日の閉会式にろうじて出席できたのみで、徳永が発熱を起こした関係で挨拶も行われていない。ただし、公式の議事録に二人の名前は掲載されている。Второй всесоюзный съезд советских писателей, М., 1955. С.604.
- 2 注1に触れた徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」を参照のこと。
- 3 例えば、以下を参照のこと。秋草俊一郎「ソ連より愛をこめて——冷戦期日本における文化交流とソフトパワー」、『れにくさ』(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室編)第10-1号、29-31頁。
- 4 アブレチン、ミハイル・ヤコヴレヴィチ Аплетин, Михаил Яковлевич (1885-1981)。教育・労働運動関係の活動家で、対外文化交流協会(ВОКС)教育局長、同書記長、副会長を歴任し、1938年よりソ連作家同盟外国委員会副委員長(～1958)。徳永は「ハリコフ会議の前の、世界革命作家同盟時代の書紀」であり、「外国委員会ではなくてはならない」「生き字引」と評している。徳永直、岩上順一、桑原武夫、高杉一郎、蔵原惟人「座談会 ソヴェト・中国から帰って」『新日本文学』第10巻第5号、1955年、175頁。
- 5 徳永によれば以下の通り。「〔作家同盟の〕外国委員会の室で午後四時から日本文学関係者五十人ばかりの人が集って、私と岩上氏にいろいろの質問を出してきました」(「ソヴェト同盟をたずねて」134頁)。
- 6 リヴォーワ、イリーナ・リヴォーヴナ Львова (Иоффе), Ирина Львовна (1915-1989、本名ヨッフエ)。日本文学者、文学者。翻訳に、高倉輝『箱根用水の話』(1954)、徳永直『静かなる山々』(1952)、小林多喜二『党生活』(1957)、徳富蘆花『黒潮』(1957)、石川達三『風にそよぐ葎』(1970)、『平家物語』(1982)など。日本文学に関する多数の業績があり、後述のように、日本での議論にも影響を与えた。
- 7 伊藤整『火の鳥』光文社、1953年。出版直後から多くの批評が文芸雑誌に掲載されたが、『文学の友』の1954年の各号には見いだせない。『新日本文学』、『文学界』、『近代文学』の各誌には繰り返し批評が掲載された。例えば、武井昭夫「批評の衰弱と頹廢——「火の鳥」と「黄金伝説」その他をめぐって」『新日本文学』第9巻第2号、126-135頁、日高八郎「「火の鳥」の問題点」『新日本文学』第9巻第5号、162-165頁。
- 8 野間宏『青年の環』第1部、第2部、河出書房、1949年。
- 9 野間宏『真空地帯』河出書房、1952年。
- 10 雑誌『新潮』は、明治37(1904)年5月5日に発刊された。昭和21年(1946)12月号で創刊500号、昭和30年(1955)4月号で創刊600号を迎えた。徳永直は当初小説の寄稿を考えていたが、「レニングラード見物記」を寄稿した。「表紙と目次で見る「新潮」110年」、新潮社 (<https://www.shinchosha.co.jp/shincho/100year/>)。
- 11 どの雑誌を示すのかは不明。ソ連滞在にかんする寄稿は『新潮』の他、『新日本文学』、『群像』、『小説公園』の各誌に行われている。
- 12 『静かなる山々』は、この場にも同席していたリヴォーワにより翻訳され、1952年にソ連で出版されている。Токунага С. Тихие горы. Роман. М., 1952. またリヴォーワの批評「徳永直の小説について」が『人民文

- 学』1952年10月号（第3巻第10号）に宮木春也訳で掲載されている。
- 13 キム、ロマン・ニコラエヴィチ Kim, Роман Николаевич (1899-1967)。ウラジオストク生。7歳で来日し、慶應義塾幼稚舎に入学、さらに慶應義塾普通部に進学。その後、ウラジオストクに戻り、極東大学を卒業するとモスクワに上京し、東洋学研究所で日本語などを担当。並行して芥川龍之介作品の翻訳などに従事。1930年前後からは諜報活動に携わるが、37年にスパイ容疑で逮捕、45年に釈放、1950年頃よりスパイ小説家となる。
 - 14 この時期の日本共産党は、1950年1月のコミンテルン機関誌掲載の批判論文「日本の情勢について」を受けて（所感を発表して反論した）所感派と（批判を受け入れた）国際派に分派した後、レッドパージを受けて所感派が非合法活動に移行し、中国に亡命して北京機関を創設するなど、分裂状態にあった。
 - 15 1945年8月の日本の敗戦後、ポツダム宣言および降伏文書に基づき連合国総司令部（GHQ）が設置され、対日政策にあたった。1951年9月8日にサンフランシスコ講和条約が調印され、日本は独立を回復してGHQは廃止されたが、同日、日米安保条約も締結された。これらの動きと並行して、レッドパージ（共産党員とその支持者の公職追放）や（戦争犯罪者の）公職追放の解除、再軍備が行われた。これを「逆コース」と呼ぶ。この背景に中華人民共和国成立（1949）と朝鮮戦争（1951-53）があった。
 - 16 1949年8月17日、福島県の東北本線松川駅付近で列車が転覆して乗務員3名が死亡した事件。共産党員ら労組員20名が起訴されると、労働運動への弾圧として、作家の広津和郎を始めとする知識人らが公正な裁判を求める運動を起こし、無罪を勝ち取った。真相は不明のままだが、初代宮内庁長官の田島道治が遺した昭和天皇との「拝謁記」には「松川事件はアメリカがやつて共産党の所為にした」との天皇の言葉が残されている。田島道治『昭和天皇拝謁記 初代宮内庁長官田島道治の記録5』岩波書店、2022年、214頁。
 - 17 現・文藝学校。1953年に新日本文学会の『人民文学』のグループを母体として開校。ねじめ正一、野崎六助、河林満、樋口有介、辻内智貴、盛田隆二らを輩出した。2003年、新日本文学会の解散を機に、現名称に改称。
 - 18 阿川弘之「間の遺産」は『新潮』1953年7-11月号に連載され、1954年に新潮社より刊行。
 - 19 足柄定之『鉄路のひびき』理論社、1954年。『人民文学』に連載された後、単行本化された。
 - 20 春川鉄男『日本人労働者』作家出版社、1954年。
 - 21 杉浦明平（1913-2001年。すぎうらみんべい）。杉浦明平『基地605号』大日本雄弁会講談社、1954年。
 - 22 霜多正次『軍作業』、『新日本文学』1954年9月号掲載。
 - 23 宮城県塩竈市の坂病院に入院中の患者で、周囲の人々の協力を得て、「生きる」を『人民文学』1954年3-7月号に連載した。
 - 24 江馬修（1889-1975年。1946-66年、日本共産党員）。『人民文学』初代編集長。『山の民』（飛騨考古土俗学会、1938-40）は幕末の岐阜高山を舞台とした歴史小説。
 - 25 中野重治『むらぎも』筑摩書房、1949年。
 - 26 佐多稲子（1904-98）。1932年共産党入党、64年に野間宏らとともに除名。「若い意欲」は『文藝』1954年10月号に掲載、後に『夜の記憶』（河出書房、1955年）に収録された。「ズボンを買いに」は『文藝』1951年7月号に掲載、後に『みどりの並木路』（新評論社、1955年）に収録された。
 - 27 『鶏の歌』という作品があることから、見玉花外を当てたが、時代がずれているため、異なる可能性も高い。
 - 28 原文は山田うた子を示唆するが、前後関係からは宮本百合子以外の可能性はないと判断した。
 - 29 『人民文学』の紙面ではその死の直後から宮本百合子は繰り返し糾弾された。
 - 30 以下を指すと思われる。岩上順一「宮本百合子の生涯と生涯と文学（上・下）」『人民文学』4(2)、(3)、1953年。
 - 31 この時点ですでに『宮本百合子全集』（河出書房、1951-1953年、全15巻）が刊行されていた。
 - 32 筆名タカクラ・テル。当時、日本共産党の北京機関に加わり、中国滞在中だった。北京機関とは、1950年のコミンフォルムの批判に伴う日本共産党の分裂後に、団体等規正令に伴う出頭命令を拒否した、いわゆる所感派の徳田球一や野坂参三らが中国に亡命して創設したもので、中央党学校のほか、日本自由放送を日本向けに行っていた。
 - 33 岩上順一『志賀直哉』三笠書房、1955年。
 - 34 ゴーリキー『作家論』みすず書房（ゴーリキー文学論集1）、1954年。

- 35 1950年10月発刊。藤森成吉、江馬修、徳永直、除村吉太郎・岩上順一、松田解子、野間宏らを中心とし、後に安部公房や杉浦明平も加わった。註14も参照のこと。
- 36 雑誌『人民文学』が『文学の友』と改称して、再出発したことを指す。1953年11月/12月合併号(第4巻第11号)まで『人民文学』、1954年1月号(第5巻第1号)から『文学の友』として発行された。1955年2月号(第6巻第2号)が最終号となった。発行継続の意志とともに「財政上の困難」が繰り返し表明されていた(64頁)。
- 37 『新日本文学』での徳永の説明は以下の通り。「『私たちは、政党内におこった対立が文学団体内に対立をうみ、「新日本文学」と「人民文学」との対立をうみだしたこと、それが解決に達し「人民文学」が廃刊され、「文学の友」は労働者農民の文学を育てるという特定の任務を持って刊行されたこと、したがって、「新日本文学」と「人民文学」は協力関係となり統一の方向に前進したことを出来るだけ慎重に答えました」(「ソヴェト同盟をたずねて」134頁)。
- 38 ネムゼル、レフ・アナトリーエヴィチ Немзер, Лев Анатольевич。日本学者、露和辞典の編者。
- 39 藤森成吉は、1930年にドイツ行き査証で出国し、ソ連に密航し、世界プロレタリア作家会議ハリコフ大会に出席し、日本のプロレタリア文学を紹介するなど、ソ連において日本の代表的なプロレタリア作家として知られていた。『人民文学』の創設者の1人であり、創刊号(1954年11月号)には「文学者と平和を守る運動」を寄稿していた。
- 40 1955年に『悲しき愛』(角川小説新書)が刊行された。
- 41 Dolio をロシア語で綴ると Долио、独歩は Doppo となり、非常に似ているため、誤記したものと思われる。
- 42 吉田茂内閣の1954年12月9日の総辞職を指す。この直後に日本民主党単独により鳩山一郎内閣が成立、翌年12月、いわゆる保守合同により自由民主党が結成され、日本社会党の再統一とともにいわゆる55年体制の成立に至った。
- 43 広島市翠町(爆心より約3km)で被災し、49年に新日本文学会に入会、同年、日本共産党に入党。52年に『原爆詩集』(青木文庫)を出版。翌年3月10日に死去(伝記事項から推定。原文表記は、理由は不明だが、川路柳虹と混同した可能性がある)。
- 44 現代詩人会編『死の灰詩集』宝文館、1954年。
- 45 松川詩集刊行会編『松川詩集』宝文館、1954年。
- 46 「峠三吉の『原爆詩集』をはじめ、持参した『広島』、『松川詩集』、『死の灰詩集』、『松川歌集』などあげたらみんな喜んでくれました」(徳永「ソヴェト同盟をたずねて」134頁)。
- 47 速記録自体には加筆された痕跡はないが、「ソヴェト同盟をたずねて」にはモスクワ滞在中にまとめられた推奨作品のリストが掲載されている。
- 48 1954年11月27日から三日間、神田共立講堂(11/27-28)・東京体育館(11/29)で開催された「原爆許すまじ 1954年日本のうたごえ祭典」を指すと思われる。
- 49 東京交響楽団は常任指揮者の上田仁のもと、ソ連音楽の初演を次々に行っていたことで知られる。
- 50 いずれも、大映画会社ではなく、いわゆる「独立プロ」の作品。順に山本薩夫、北星、亀井文夫が監督を務めた。

(うめつ のりお 教育推進機構 国際キャリア科 非常勤講師・客員研究員)

(よしだ もりお 教育推進機構 国際キャリア科 教授)